

【視察調査報告書】

会 派 名	レボリューション八王子
参 加 議 員	【議員】 1名 及川 賢一
日 程	令和5年(2023年)8月2日(水)～8月4日(金)
詳 細	
視察日及び視察先	8月2日(水) 奈良県 生駒市
視 察 内 容	スポーツリーダーバンク制度と、まちづくり人材バンク制度の運用方法と効果について
概 要	<p>生駒市で進められている「まちづくり人材バンク制度」と「スポーツリーダーバンク制度」とは、専門的な知識や経験、技能を持つ市民の力を、地域振興やスポーツの普及に活かしていく取り組みである。</p> <p>■まちづくり人材バンク</p> <p>・経緯</p> <p>まちづくり人材バンク制度は、生涯学習に関する人材バンクとして運用している。H3年度に、生涯学習推進団体による生涯学習登録制度としてスタートした後、H19年度にバンクを引き継ぐ形で市の事業へと移管された。</p> <p>人材バンクに関する予算は職員費以外には計上せず、市職員が運営業務を担っている。</p> <p>・まちづくり人材バンクの運営における市の業務</p> <ul style="list-style-type: none"> -人財の登録、更新および取り消しに関する業務 -登録情報の管理および提供に関する業務 -人材の発掘および要請に関する業務 -その他、人材に関し必要とされる業務 <p>・人材バンクへの登録について</p> <p>美術、工芸、音楽、舞踊、文芸、生活、趣味、語学、教養、各種資格など、生涯学習に関するあらゆる分野の専門的知識を持った人材を対象とし、新規の登録は随時受け付けている。</p> <p>登録を希望する市民は、人材バンク登録申請書を生駒市教育委員会に提出し、教育委員会が適当と認めた場合に人材バンクへと登録される。</p> <p>バンクに登録された人材は、一度登録すると3年間は自動的に継続され、3年ごとに再登録の意向を確認している。</p>

・人材バンクの利用について

人材バンク登録者のリストは、市のホームページに掲載されている他、市役所窓口や公民館、市民活動推進センターなど、市内の計 10 カ所で閲覧することができる。

人材バンクの利用を希望する市民、団体は、担当所管に利用依頼を申し出、市経由で人材バンク登録者を紹介している。

バンク登録人材への謝金は、人材によって異なるため、金額交渉は市を介さずに人材と依頼者間で相談のうえ決めている。

・施策の成果

直近 5 年間の登録者数(個人・団体)は以下のとおり。

	登録者数			利用	
	個人	団体	計	回数	人数
H30年度	46	24	70	491	7129
R1年度	44	22	66	471	11586
R2年度	42	19	61	484	5336
R3年度	43	19	62	326	2508
R4年度	36	14	50	351	3610

利用回数は減少傾向にある。減少の理由としては、新型コロナウイルスの影響もあるが、SNS やインターネットの普及によって、人材バンクを利用しなくても自ら情報発信して利用者を集められること、利用者との関係性が構築されると直接のやり取りが可能となることが挙げられるという。

利用者の減少もあって、H29 年度からは新たに、夏休み期間中に 80 コマ程度の講座を開催する IKOMA サマーセミナーというイベントをスタートした。

まちづくり人材バンクの利用は減少傾向にあるものの、サマーセミナーなどを通じて市民同士が繋がり、別の機会で講師の依頼を受けるなど、活動の幅を広げることに繋がっている。

■スポーツリーダーバンク

・経緯

まちづくり人材バンクが H19 年度から市の事業となった後、総合型地域スポーツクラブを進める中で、人材の育成と活用が重点施策に入っていたので、スポーツリーダーバンク制度が H24 年度からスタートした。

・市の業務、登録、利用について

まちづくり人材バンクと同様に、募集要項と申請書を配布し、市民に登録してもらい形式で運用しているが、スポーツでは、①実技ができる市民と、②講義ができる市民の 2 通りに分けて登録してもらい、講師の名簿をスポーツ施設の窓口などで閲覧できるようにしている。

まちづくり人材バンクと同様に、人材バンクに関する予算は職員費以外には計上せず、市職員が、募集、登録、紹介などの運營業務を担い、利用を希望する市民、団体が所管に利用依頼を申し出、市が人材バンク登録者との調整をおこなう。

	<p>・施策の成果</p> <p>総合型地域スポーツクラブのイベント等で、講師を探す際に利用されているが、利用人数が多くないのが現状。</p> <p>登録しているスポーツリーダーには専門的な有資格者が多く、指導が有償であることを理由に利用を敬遠されたり、市職員が実施している無料出前講座で代替されるというケースも多くある。</p>
<p>所 感 等</p> <p>(意見・課題・本市への反映など)</p>	<p>今回、生駒市の人材バンク制度を視察した理由は、市民活動やスポーツをはじめとして、その他まちづくり全般につながる市民力の活用策を学びたからである。</p> <p>少子高齢社会の進展によって八王子市の行財政運営が厳しくなっていく時代にあっては、行政だけで地域課題を解決しようとするのではなく、市民が持つ多様な資格やスキル＝市民力を活かし、市民協働のまちづくりを進めていく必要があり、生涯学習とスポーツという分野での先進市である生駒市の取り組みを視察した。</p> <p>視察してみて発見があったのは、まちづくり人材バンクも、スポーツ人材バンクも、導入当初一定期間は利用人数が増えていき、その後、年数を経るにつれて、バンク自体の利用者が減少していったという点である。</p> <p>その要因としては、人材バンクの利用をきっかけとした連絡先の交換や、SNS などの利用によって市民間で人材活用が進んだことが大きく、行政側では新たにサマーセミナーや地域のスポーツイベントなどにも取り組んでいるというので、利用者が減ったことはある意味では望ましい姿なのかもしれない。</p> <p>ただ、行政を介さないというのは、行政側の負担が生じないという点では望ましいが、どのような人材が市内にいて、その人材がどのように活用されているかを把握できないという問題を生じさせる。</p> <p>行政側の企画やイベントはもちろん、部活動の地域移行での活用、災害時の市民力活用など、行政側で市民力を把握しておけなければ、市民力のさらなる活用や発展につなげられないため、仲介はせずとも行政側で情報を把握しておく必要はあるように感じた。</p> <p>生駒市としては、コーディネーターのような繋ぎ役や、出会う場づくりなど、もう一步踏み込んでいきたいと考えているとのことだったが、工数と効率化とのバランスをどうとっていくかが課題であるようだった。</p> <p>八王子市では、市民活動応援サイト「はちコミねっと」を運用しており、市民の市民活動を応援するための仕組みは一定程度実装されているが、はちコミねっとでは、市民の資格やスキルといった市民力を行政サイドで把握し、活用するまでには至っていない。</p>

	<p>市民力の把握と活用という行政側のニーズと、自身の地域貢献や繋がりづくりなどといった人材側のニーズ、それらの人材を活用したい市民や団体のニーズ。生駒市の事例を見るに、DXが進み、社会環境の変化に伴って利用者のニーズも変化し続ける中、それぞれのニーズを上手く満たし続けられるような仕組みづくりは簡単ではない。</p> <p>ニーズの変化を注視しながらインセンティブを提供していくか、もしくは災害時など緊急時の備えという普遍の動機づけによって登録を促していくなど、いくつかの対応策は考えられるが、シビックプライドの醸成も併せて進めることで、利用者自身のニーズだけでなく、市民力の活用によって市民ともにまちづくりを進めていくという行政側のニーズを理解してもらうことも欠かせないと感じた。</p>
--	--

視察日及び視察先	8月3日(木) 兵庫県 西宮市
視察内容	公共サインの適正化事業の進め方と課題について
概要	<p>西宮市で取り組んでいる公共サイン適正化の取組は、公共団体が設置する表示サイン(規制や誘導、注意喚起、利用案内、啓発など)のデザインや形状を統一的に見直し、サインの本来の目的である移動の円滑化や利便性・安全性の向上と、まちの良好な景観形成へと繋げる取り組みである。</p> <p>経緯： 様々な種類のサインが街中に設置されていたが、それらの多くは仮設で場当たり的に設置されてきたものであったため、情報をわかりやすく伝えるという本来の役割が果たせていないという課題や、美観や安全性を損ねているという問題を抱えていた。 そこで、文教住宅である西宮市にふさわしい街並みをつくるべく、H30年1月から公共サインの適正化に取り組むこととなった。</p> <p>現状調査と課題整理： 西宮市内に設置された公共サインの数は、約8500件(令和1年11月時点)。市内のサインの状況を精査したところ、以下のような問題があることがわかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一定区域内におけるサインの乱立、密集 ・フェンスや壁面などへの無秩序な配置 ・メンテナンス不足による劣化(錆びや破損、文字の消失) ・サインが原因で生じる死角による交通事故リスク ・色の組み合わせや筐体の形状が目立ちすぎることによる情報の見にくさ ・デザインの不統一(同じ情報を異なるデザインで伝達) ・情報量が多すぎることや、文字情報だけで表示されていることによる分かりにくさ ・植栽帯など経年の環境変化により見えなくなっている <p>それらの問題から、①都市景観上の問題(市内の公共空間にあるマナーサイン注意喚起等の看板類が美観を乱している)と、②情報伝達上の課題(伝えたい内容が適切に伝わっていない)という2つの課題を定義し、効果的かつ、まちの美観を損なわない公共サイン作るべく、西宮市公共サインデザインマニュアルを策定することとなった。</p> <p>西宮市公共サインデザインマニュアル： デザインマニュアルに作成にあたっては、H30年度に公募型プロポーザルを実施し、マニュアルの作成と、オリジナルピクトグラムを作成を株式会社 GK 設計に業務委託し、サイン設置の基本方針としての、【基本的な考え方】と【原則】を定め、それらに基づいてデザインマニュアルの基本ルールが策定された。</p>

【基本的な考え方】

- 公共サインの位置づけからの観点：広く分かりやすいデザインと効果的な配置による十分な情報伝達力の確保
- 景観調和の観点：建築や街路などまちなみと調和した配置やデザイン
- 設置方針：極力不要なサインは設置しない

【原則】

- 常設サインを基本とすること
- 仮設サインは原則設置しないこと ※仮設サイン＝横断幕やのぼりなど
- 本マニュアルを遵守すること

基本ルールは、①サイン設置の考え方、②デザイン統一の考え方、③表示面の基本ルール適用の考え方、④維持管理の考え方の4項目から構成される。

以下、それぞれについての考え方と主なルールを記載する。(詳細については、西宮市公共サインデザインマニュアルを参照：)

①サイン設置の考え方

- 1、サイン計画の策定：必要なサインの抽出、大きさ・配置・デザインの決定
- 2、見直しの検討：設置後、位置や情報伝達等に不備がないかを確認
- 3、適正化：必要に応じ、設置期数や表示内容の修正を行う

具体的なルール

- 既存の建築物や工作物等との一体化を図る
- もっとも効果的な位置に必要最小限のサイズを設置する
- 歩行者の邪魔にならない位置とし、死角を生まない
- 複数設置する場合は、高さを揃え、均等に配置する
- 複数設置する場合は1つの筐体に集約する
- 設置後も見直し、設置数や表示内容の最適化を行う

②デザイン統一の考え方(計上、素材、色に関するルール)

- 水平垂直でシンプルな形状により景観との調和を図る
- 屋外でも劣化しにくく、素材の美しさを保つことのできるのを使用する
- 景観に調和しつつ、表示する情報をわかりやすく伝える色彩とする
- 多様な色覚に配慮し、誰にとってもわかりやすい色の組み合わせとする
- 景観に調和する低明度、低彩度の落ち着いた地色を使用する
- 文字色は、無彩色(白～黒)を使用する

③表示面の基本ルール適用の考え方(ピクトグラム、文字情報のルール)

- 内容の伝達を直感的に行うことができるピクトグラムを積極的に使用する
- 標準案内用図号(大部分がJIS規格化)及びJISのピクトグラムの使用を原則とする
- 独自にピクトグラムを作成する必要がある場合、景観担当部署と協議の上で決定する。(類似のピクトグラムは安易に作成・使用しない)

	<p>-情報をすばやくわかりやすく伝えるため、文字情報は精査し端的に表記する</p> <p>-共通フォントの使用：マニュアルに定めるフォントを使用し、デザインに統一感を出す</p> <p>-文字サイズ：文字や図号のサイズは視認距離に応じた必要最小限度の大きさとする</p> <p>-多言語表記：原則 2 ヲ国語表記とし、その他の言語については QR 表示等を検討する</p> <p>④維持管理の考え方</p> <p>管理台帳の活用</p> <p>-管理番号、設置場所、設置年月、サイズ、仕様、施工写真、配置図、その他必要となる情報を記載</p> <p>メンテナンス</p> <p>-定期的な表面のチェックと清掃、点検、修繕を行う</p> <p>-植栽帯の中のサインは、植栽を定期的に剪定する</p> <p>-サインの表示面は劣化の状態により 10 年をめどに更新する</p> <p>マニュアル策定後の取組：</p> <p>マニュアル策定後の運用について、サインの撤去、設置に関しては、原則、各所管課で管理、予算化することとし、デザインマニュアルに沿う形で、各所管でサインの作成に取り組んでもらっている。</p> <p>デザイン課では、新規のデザイン作成などを委託するための費用を毎年 100 万円程度計上しているほか、デザインマニュアルとの整合性の確認は都市デザイン課が担っており、原則すべての公共サインの取り扱いについて、都市デザイン課への届け出が必要となるように規則改正を行い、サイン計画時には事前協議をお願いしているという。</p> <p>当初、事業の計画期間は 3 年間の予定であったが、コロナ禍の影響があったこと、また公共サインデザインマニュアルに対する理解の浸透や、既存サインの整理作業に想定以上の時間がかかったことから、R5 年を迎えた現在も継続して取り組んでいる。</p> <p>市民からの反応としては、まだまだごみステーションを中心に評価の声を頂いているが、まだ理解を得られていない部分もあるので、引き続き丁寧な説明と啓発活動に努めていきたいとのことであった。</p>
<p>所 感 等</p> <p>(意見・課題・本市への反映など)</p>	<p>今回の視察で、とくに知りたかったのは、まちの景観デザインの向上に向けて、1、デザインに関するマニュアルをどのように策定したのか？2、マニュアルの運用にあたって、デザインの必要性を市役所内と市民にどう理解、浸透させるのか？という 2 点である。</p>

デザインマニュアルの内容については、詳細に話を伺うことができ、フォントや色、素材など詳細に定められたマニュアルは、さながら公共サインデザインの教科書のような作りであり、大変勉強になった。

この取り組みに関する市役所内、市民への理解の浸透については、それが西宮市にとっても苦勞した点であり、現在においても課題であるという話を伺ったが、デザインの良し悪しに対する評価は、芸術に対するそれほどではないにせよ、個人の見識や嗜好による部分が大きく影響することが多く、また時代の変化に伴う流行もあるため、共通の理解を得るのが難しい。

そこで、共通規範としてのデザインマニュアルが有用性を発揮するのだが、そもそもデザインがどうしても必要なのか？デザインに時間や費用といったコストをどこまでかけるのか？デザインが良くないサインは悪なのか？といったような意見は、どの地域でも生じているように思うし、八王子市で同様の取組を実施した場合にも、理解得ることや調整に苦勞する部分かと思う。

西宮市においては、それに対する啓発活動に根気強く取り組み続け、市民に向けては街づくり塾などを実施しているほか、阪神電気鉄道が甲子園駅前広場の再整備を行った際のマナーサインを西宮市のマニュアルに即して作成してもらうなど、市民や民間企業も含めた取組も進めている。

また県や国の公共サインとの整合性については、西宮市のマニュアルへの適合を努力義務とし、サイン設置の協議や届出の際に、マニュアルの説明と適合への協力を依頼しているとのことで、少しずつ、様々な関係者の理解を促しながら、根気強く進めていくことの大変さと、必要性を知ることができた。

八王子市では、民間の屋外広告物に対する屋外広告物条例を制定し、作成したマニュアルに基づいた運用がなされているが、行政側で作成する公共サインについては、西宮市が当初の課題として挙げていたような、昭和の時代に作成されたサインの乱立、無秩序な配置、劣化などの状況が放置されている。

住宅都市である西宮市と比較すると、八王子市は市域が広く、山林面積も大きい上、市役所の所管数も多いため、サイン作成時の事前協議などを1つの所管で担うことも課題となることから、すぐに市内の公共サインすべてを見直すような取組は難しいと思うが、どこかのタイミングで取組を始めなければ、公共サインが抱える問題は解決されない。

そのため、新規設置や更新のタイミングでは、都市の景観と情報伝達に配慮したサイン作成を促していきたいと考えるし、その指針となる統一的なルールやマニュアルについてもどのような形で作ることができるのか、今後の検討課題としていきたい。

視察の様子



Public Signs
01
西宮市公共サイン デザインマニュアル
令和3年(2021)4月
西宮市

公共サイン（看板類）の適正化に取り組みます

1 西宮市における公共サインの問題点

公共サイン（看板類）の乱立が街の美観や安全、効果的な情報伝達を損ねています



美の結核が不快 看板が死角をつくり視認 看板が緑色し景観が壊れ 情報が多すぎて見づらい 看板の設置が不適切

そこで、仮設の看板類を設置しないこととし、街の美観や安全に配慮した効果的な公共サインの設置ルールを策定しました！

2 公共サイン設置の3つの原則

1. 景観と耐久性に配慮
景観や景観形成と調和する観点から、一定の高さを確保する等適切なサインの美観的な設置を基本とします。
2. 仮設サインは原則設置しない
仮設看板の乱立を防止
仮設サインは、現用のかつ実質的に高まる必要はないものを除き、期間限定で設置するものとします。
3. 公共サインデザインマニュアルの遵守
景観へ配慮したアサインのサイズ、設置などのルールを定めたマニュアルに基づき設置を行います。

3 今後設置する公共サインのイメージ

景観に配慮し、配布するサインは、公共サインデザインマニュアルに定められたルールに基づき設置するものとします

BEFORE AFTER



4 今後の流れ

公共サインデザインマニュアルの施行後（平成30年1月1日予定）下記の流れで、本市の公共サイン適正化を進めていきます

- step1 西宮市内に存在する公共サインの現状を把握します
- step2 整理したものを、分類し、必要に応じて撤去します
- step3 必要な設置サインを策定します

実施期間目標 令和3か年を目標

お問い合わせ：西宮市役所 都市環境部 都市デザイン課 079-93-3526

西宮市デザインマニュアルと公共サイン適正化の取組のイメージ

視察日及び視察先	8月4日（金）石川県 金沢市
視察内容	金沢未来のまち創造館における「スタートアップ・新ビジネス創出」、「子供の独創力育成」、「食の価値創造」事業の取組と成果について
概要	<p>今回視察した金沢未来のまち創造館は、「スタートアップ・新ビジネス創出」、「子供の独創力育成」、「食の価値創造」の3つを柱とした事業活動を展開し、金沢市における新たな産業の創出と未来で活躍する人材の輩出を図る官民連携型の価値創造拠点施設である。</p> <p>管理運営は金沢市が行い、3つの事業活動は公募型プロポーザルにより選定された一般社団法人 CLL が担っている。</p> <p>沿革</p> <p>H28年に廃校予定となっていた野町小学校の活用について、H25年に検討委員会が発足し検討を進める中、H30年に金沢市が新産業創出ビジョンを策定したことを受けて、価値創造事業の拠点施設としての活用という方向性が固まり、H31年に価値創造拠点づくりに向けた基本構想を策定した。</p> <p>基本構想の中では、食文化「のまち」、好奇心「のまち」、企業「のまち」、交流「のまち」という4つのテーマに基づいて、スタートアップ・新ビジネス創出業務、子供の独創力育成業務、食の価値創造業務を行うことが示され、それらの活動を推進する運営事業者をR3年4月に公募型プロポーザルで募集した結果、一般社団法人 CLL が選定され、R3年8月に開館を迎えた。</p> <p>改修にかかった総事業費は、約10億3000万円で、財源の内訳は、国の社会資本整備総合交付金が4億6500万円、公共事業債が4億1400万円、一般財源が1億5100万円となっている。</p> <p>改修費用の他ににかかった主な費用は、施設に導入した設備や備品に1000万円程度。</p> <p>各フロアにおける活動の概要と主な施設、設備</p> <p><u>1F：交流のまち：交流カフェ「ノマチカフェ」</u></p> <p>各フロアの活動から生まれた様々なアイデアを共有し、それぞれの活動に反映する交流の場として活用されるカフェ。</p> <p>カフェとしてランチタイムの飲食ができるほか、4Fの食藝研究所で開発されたメニューの提供や、3FのVIVISTOPで子ども達が制作した作品の展示、2FのTENJO KANAZAWA で支援する事業者の新製品やサービスを体験することができる。</p> <p><u>2F：企業のまち：TENJO KANAZAWA</u></p> <p>ビジネス経験豊富なスタッフが、「食」「ものづくり」「子どもの未来」に関わる事業に特化した起業支援や事業相談を行うとともに、ビジネスのスタートアップに有効なサービスと施設を備えたフロア。</p>

起業や新規事業の起ち上げなど、新たな価値を創造しようとしている人に、メンバースhip登録(無料)してもらい、以下のサービスを提供している。

- 1、メンタリング：TENJO KANAZAWA のメンターが企業や事業創出の相談に対応。
- 2、コミュニティ：TENJO KANAZAWA のメンバーを対象とした交流機会づくり。
- 3、イベント：起業家や技術家を講師に迎えたセミナーや、座談会などの開催。

TENJO KANAZAWA に用意された主な施設

・コワーキングスペース

金沢の未来を創造しようとする人が集まる共創の場として、起業支援や事業相談を行なうとともに、定期的にイベントを開催し、起業家間のコミュニティの醸成を図っている。

開室時間：9:00～21:00

利用料金：無料

・シェアオフィス

以下のいずれかに概要とする者が利用できるシェアオフィス

- 新規に事業を行おうとする者
- 事業を開始してから3年未満の者
- 既存の事業から新分野への進出を考える者
- 最先端技術を活用して新たなビジネスを展開する者
- 食と工芸に付加価値を生み出すもの
- その他これに類するもの

使用期間：1年ごとの更新(最大3年間)

使用料：1名1月あたり8000円 ※水光熱費を含む

設備：机、椅子、ロッカー

・オフィス

以下のいずれかに概要とする者が利用できる6室のオフィス

- 新規に事業を行おうとする者
- 事業を開始してから3年未満の者
- 既存の事業から新分野への進出を考える者
- 最先端技術を活用して新たなビジネスを展開する者
- 食と工芸に付加価値を生み出すもの

使用期間：1年ごとの更新(最大3年間)

使用料：面積に応じて16750円(13.4㎡)～40000円(32㎡) ※水光熱費を含む

設備：個別空調機

・託児室

当施設の活動に参加するこどもの弟妹を預かるほか、病気やリフレッシュなどの理由により、一時的にこどもの世話ができない場合にも利用できる託児室。

託児対象年齢：6ヶ月以上～未就学児

利用料金：1名1時間当たり 500円

・多目的室

机、椅子、プロジェクター、ホワイトボード、音響設備を備えた、イベントやワークショップに利用できるオープンな空間

広さ：172㎡

3F：好奇心のまち：VIVISTOP KANAZAWA

「未来を創るのは、子どもたちの好奇心。」をテーマに、世界中で子ども達の可能性を広げる場づくりを手掛ける VIVITA が運営するフロア。

「Discovery」と「Initiative」の2つを活動軸として、子どもたちの創作、ワークショップとして使える数々の部屋が設けられ、伝統工芸とテクノロジーを組み合わせることで新しい表現を生み出すとともに、自由なアイデアを形にできる様々な機材が用意されている。

活動軸1：Discovery

ひとつの大きなテーマについて多様な人が連携しながら、約1年かけてじっくり進めていく活動。

活動テーマをひとつの科目や領域として捉えるのではなく、多角的な切り口からテーマを見つめ、探求し、創造していくことで、今持っている興味の枠を越え、新しい興味や好奇心に出会うきっかけをつくる。

活動軸2：Initiative

自分のやりたいことや、つくりたいもの、挑戦してみたい夢や、自分や周囲の人が抱える課題を解決するアイデアなど、「実現したいなにか」を見つけた子ども達が、そのビジョンを他者に共有し、その思いに心動かされ、共感してくれる人たちからの「エール」を受けながら実現していく活動。

エールを受けるためには、VIVISTOPで定期的に開催されるイベント「超STOP会議」や「VIVISTOP Kanazawa Idea PITCH」の中で、自分のビジョンやアイデアをプレゼンし、協力者を募る必要がある。

エールを受けた子どもたち(ビジョナリー)は、そのエールを活用し、どうしたら自分のビジョンが達成、実現できるのかを考えながら、アイデアや思いを実現させていく。

VIVISTOP に用意された主なスタジオと機材

1、huddle room

アイデア出しをしたり、色々なツールや素材を使ってプロトタイプングする部屋

2、discovery room

その年のテーマに沿って、1年間探求と制作をする部屋

3、studio

写真や動画の撮影スタジオ。制作した工作の撮影などに使用。

4、digi&fab room

デジタルデータを制作、加工できるファブラボ。様々な精密機器が使える。

5、factory

木工用の大型機材や伝統工芸品の制作部屋。大型の電気釜や塗装ブースも完備。

6、tea house

保護者や、創造館に係る大人たちが一息つけるカフェスペース。

4F：食文化のまち：金沢食藝研究所

金沢の文化の象徴であり経済の礎である「食」に、新たな価値を創造するために発足した食の研究拠点。

プロアマ問わず食に関わる全ての人に、食に関する多面的な視点や技能を共有し、実践を通じて食の未来を切り拓く、多様なアイデアを探究する場と機会を提供している。

レシピアーカイブと、自由研究、食の楽しむ層の裾野拡大の3つを軸に金沢における新しい食の価値創出を図っている。

1、レシピアーカイブ

伝統的な料理の技法から家庭のレシピまで、さまざまなジャンルの創作データを蓄積し、オープンソース化する取り組み。

データは単に数値的な情報だけでなく、料理が生まれる過程における思考等の背景も含めたカタチでアーカイブされ、パネルなどに印刷されたものを1Fのノマチカフェで展示している。

2、自由研究

料理の専門家を対象とした、最新の高度調理機器や多様な食材を使った新たな技法やレシピの研究。

開発された技法・レシピの共有を利用条件とすることで、更なる食の発展に繋がっている。

3、食の楽しむ層の裾野拡大

一般消費者層に向け、開発の過程や食の専門家の技術、考え方に触れる機会を提供し、食の価値を新たに発見するきっかけづくり。

未来の食文化を担う若年層に対しても、食の専門家との交流機会やコンテストの開催によって、次世代の食文化の地盤づくりに繋げていくとともに、バリアフリーな環境を用意することで多様な利用者が調理に携わることができる。

金沢食藝研究所に用意された主な施設と設備

・調理室

あらゆるジャンルの料理に対応した最新の調理機械、設備を揃った、専門的な調理室。

プロ登録者のみでなく、一般の利用も可能。

・飲料研究室

ドリンクの研究に特化したプロ登録者専用の施設。

様々なリキュールやアルコールなどが並び、レシピ開発や成分変化などを分析できる機具が用意されている。

・製菓研究室

パティシエの研究に特化したプロ登録者専用の施設。

製菓の製造に関する、最新の調理機械、設備が用意されている。

運営

市からの委託によって、施設の運営を手掛ける一般社団法人 CLL は、TENJO と VIVISTOP と食藝研究所の 3 団体によって構成されており、本施設の運営のために組織された法人である。

ほとんどの施設が無料で利用できるようになっており、各フロアの運営費用は市からの委託金によって賄われており、年間の委託料は 1 億 2000 万円程度となっている。

活動の成果と課題

2F の TENJO KANAZAWA は、オフィスが 6 室、シェアオフィス、研究室 11 カ所の全てが満室となっており、入居者の選定は、希望者によるプレゼンテーションを審査会で審査して、価値創造につながるかどうかで決定している。

平日のコワーキングスペースも利用されており、多様な入居者、利用者が集まり、コミュニティも形成されてきたので、定期的な交流会なども実施されているが、食に関する事業を営む事業者がいないことが課題であるため、来年度以降の更新で入居を促していくとのこと。

3F の VIVISTOP は、すでに 150 名の小学生がメンバー登録している。

開館 1 年目の昨年度は、究極のカレーづくりを Discovery のテーマとし、食器や衣装、部屋の装飾、寓話など、様々な角度からカレーに関する研究と創作を行う

	<p>ことができた。</p> <p>定期的に開催されるワークショップも人気があり、こどもたちの居場所、学びや遊びの場としてにぎわっているが、1日の受け入れ人数に限りがあるため、定員になってしまうことが課題となっている。</p> <p>4Fの食藝研究所では、研究室や調理室の貸出事業を通じて開発されたレシピのアーカイブとレシピの展示、ノマチカフェでのメニュー提供などに取り組んでいる。食藝研究所自体が、飲食店や生産者など、金沢市内の食に係る自体が連携して組織されていることを活かして、金時草やつる豆など、加賀野菜を生産する農業者と連携したレシピ開発なども進めているほか、こども向け和食のジュニアエリート養成事業として、こどもが和食を学ぶ講座なども開催している。</p> <p>現時点では若手料理人の利用が多く、プロフェッショナルの料理人の利用が少ないため、PR活動による周知を通じて、利用者増に向けて取り組んでいる。</p> <p>各フロアの連携事業の例としては、2Fと4Fで食に関する創業の相談や企業支援の取組を進めるほか、3Fと4Fが連携して開催している、「食塾」というこども料理教室の開催など、様々な取り組みが進められている。</p> <p>当施設の周辺への効果としては、施設の開館後、中心市街地の交流人口が増加しており、定期発行物「のまち便り」を通じて、地域に活動報告を行うとともに、貸館事業として運用している空き教室を改装した公民館や、校庭、体育館なども、近隣住民に広く利用してもらっている。</p> <p>その他、お祭りなどのイベントを通じた交流によって、地域とも良好な関係が築けているという。</p>
<p>所 感 等</p> <p>(意見・課題・本市への反映など)</p>	<p>金沢未来のまち創造館を視察して、まず驚いたのは、施設の設備とサービスのレベルの高さである。</p> <p>施設ができて間もないこともあるが、創作室や工作室、研究室など、それぞれの部屋に用意された機器はいずれも高性能なものが揃えられており、その使い方をレクチャーする人材も高い専門性を持ったスタッフによって構成されている。</p> <p>Fablab など、1つ研究室だけでも、自治体の先進的取り組みとして注目されるような部屋がいくつも並んでいることは驚きであったし、施設や設備だけでなく、またそれらを活用したコンテンツも魅力的なものばかりであるため、起業家やこどもたちなど各フロアの利用者希望者が多く、定員となって受け入れきれないという状況も納得だった。</p> <p>また未来のまち創造館では、施設内のすべてにおいて、デザインの配慮がなされており、装飾や掲示物による食の紹介や、こどもたちの成果発表、コミュニティの情報共有の掲示板など、活動の魅力のより良く伝えるデザイン性も素晴らしかった。</p>

スタートアップに関する施設や、子育てに関する施設、食に関する施設など、個々の目的を持った創造拠点は全国で他にも存在するが、それらの3つの機能を持ち、連携させる複合施設というのは、他に例をみない。

金沢の新たな価値創造と人材育成を目的とした拠点を作るうえで、食をテーマに選んだのは、前田家から続く、武家文化、和食の伝統が理由とのことであったが、起業、生産業、観光業など、食をテーマにしたことで様々な分野での創造へと繋げることができるし、食や起業、こどもたちの学びと繋げることで、金沢の未来づくりにも繋げることができる。

それらの取組を有機的に繋げ、シナジー効果を生み出していくことは、簡単ではないのかもしれないが、運営を手掛ける一般社団法人 CLL の構成者はそれぞれが実績を持った団体であり、金沢の未来を作るためのアイデアと情熱を感じられる取組を開館1年目から進められていると感じた。

食をテーマに絞ったスタートアップ拠点ということで、計画段階では市民、市議会等から様々な質疑があったというが、現在は理解を得られているとのことであったし、この拠点から生まれる取り組みと成果が、今後広く注目され、同様の取組が全国に広がっていくことを期待したい。

八王子市においても、食を活かしたイベントやまちづくり、起業・創業のスタートアップ支援、こどもたちの創造力を伸ばす取り組みなど、個々の取組は行政のみならず民間でも実施されているが、個別で見ても行政によるこれほどの支援の仕組みや設備はなく、それぞれの連携もさほど進んでいない。

行政の公平性という言葉があるように、特定の産業や分野に絞った取り組みというのは、行政として進めにくいのかもしれないが、現代の八王子には様々な産業があり、様々な産業があるが故に、かつての織物産業のような誰もが認める現代の八王子を代表する産業を作ることができていない。

過去の栄華を見続けることなく、現在のまちのリソースを見つめなおす。

選択と集中の中でまちの未来を描き、未来に向けたハードとソフト両面の施策を展開していく。

現代の八王子市にとって、この金沢市の取組から学ぶべきことはとても多く、今回得られた学びはもちろん、今後も金沢未来のまち創造館の取組とその成果を注視し続けることで、八王子の未来のまちづくりに活かしていきたいと思う。

視察の様子



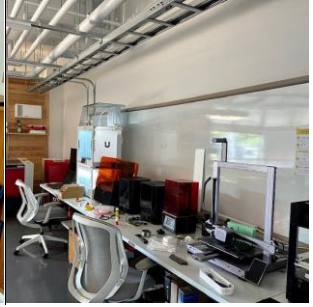
huddle room



discovery テーマのプール



スタジオで撮影した工作



3D プリンター等の fablab



カレーを食べる衣装



tea house



無料コワーキングスペース



食藝研究所のメンバー



飲料研究室



最新調理機器



一般の人も使える調理室



開発レシピの共有パネル